

雪村展その後

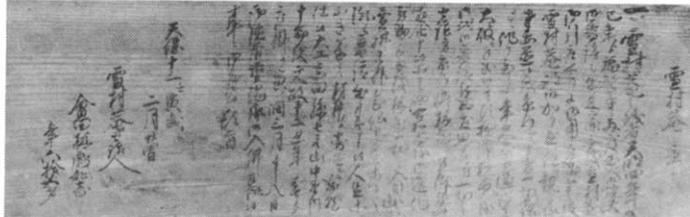
— 楊柳水閣図と雪村庵 —

かつて世の中に現われて、ある時から忽然と、わたしたちの目の前から姿を消してしまった名画が少なからずあります。そのような幻の名画を『入札目録』の中で、よく見ることがあります。

今年の2月6日、雪村の画を所蔵している人がいるというので、友人のO氏に案内してもらって、大阪の南の岸和田市に住む美術品蒐集家H氏の家に拝見に出かけました。そこで、はからずも長年探し求めていた雪村の初期の名作「楊柳水閣図」（紙本淡彩、86.3×35.4センチ）にめぐりあうことができました。この作品は昭和11年の『神戸川崎男爵家蔵品入札目録』に原色図版で掲載されましたが、その後、行方不明になっていたものです。特別展を開催しますと、このような経験にしばしば出会いますが、これは美術館の学芸員の楽しみのひとつです。

さて、差し出された桐箱の口貼りに、「柳蔭山水、雪村筆」の墨書がありました。軸を取り出し、少し開くと淡い藍色で描かれた遠山の危峰が現われたので、これはきっと川崎家旧蔵の「楊柳水閣図」に違いない、そうあってほしいと思いました。軸を開いていくと、予感は当たり、江岸の楊柳の陰で、瀟瀟とたとう碧水に浮んでたつ水閣の雄麗な姿が目前に現われてきました。はじめて見る画です

板書「雪村庵の事」(会田敏春氏蔵)



が、なつかしいという気持ちになりました。

この画を見て感じたことは、近世の文人画の洗練された感覚に近いということです。みずみずしい墨調、軽く繊細な筆致、藍と代赭の明るい色彩感などがそれです。また、春風に揺れる枝垂柳と、力強く反り上がった屋根をもつ水閣とを組み合わせるといふ画面構成は奇趣に富んでいます。もう、すでに雪村の特徴がでています。この画面構成は南宋時代の馬遠やその亜流の画家が描いた「周茂叔愛蓮図」（楊柳の陰の水閣にて周茂叔が蓮を観ている図）のような作品にヒントを得てできたものではないかと思われます。この画のおもしろさはそのような主題をはなれて、雪村独自の自由な画の世界を創り出しているところにあります。この画にかぎらず、雪村の初期の作品は雪村の中国画への強いあこがれを感じさせます。

ところで、昨年12月11、12、13日の三日間、当館の雪村特別展が機縁で、福島県の三春町教育委員会会の招待で、三春に行ってきました。

三春は郡山市の東隣り、阿武隈山脈の西裾の谷間に開けた古い小さな城下町です。この地の郷土玩具の三春駒や三春張子はよく知られています。この三春は雪村が小庵を結び、晩年の十数年間を過し



楊柳水閣図
雪村筆



雪村庵

たところでもあります。

今回の三春行きの目的のひとつは、三春の人たちに郷土の画家雪村について、スライドを用いて講演することでした。その講演会は12日(土)の夜の6時から、教育委員会の主催で、臨濟宗恵日山福聚寺(復庵宗己開山、戦国武将田村氏の菩提寺)の大書院で開かれ、百数十名の町民がわたしの話を熱心に聴いてくれました。

三春行きのもうひとつの目的は雪村が住んだと伝えられる雪村庵を訪ねること、12日の昼、三春町歴史民俗資料館準備室の諸先生のお世話で長年の夢がかないました。

雪村庵は三春の旧城下より西北へ2キロメートルほどいった雪村部落と呼ばれる少し開けた谷間の北側の山裾にあります。この地は古くは田村郡三春荘李田村といわれておりましたが、昭和40年の市町村合併により郡山市西田町字雪村となっています。その谷間を国鉄磐越東線が通り、鉄路に沿って八島川が流れています。

この雪村庵は現在、旧家の会田敏春さんによって管理されており、今回、わたしたちは会田さんの案内で雪村庵をゆっくり見学することができました。この会田家は、戦国時代に田村氏を頼って会津から三春に移り李田村に居住した豪族会田盛尊(永禄11年没)の末裔で、雪村在世時より現在に至るま

で代々、雪村庵(里人は雪村屋敷と呼ぶ)を保護し、世話してきたといわれています(写真)。

雪村庵は山裾の斜面に竹林を背景にして独り建っており、庵の右手に会田氏の家があります(写真)。ここに来るまでは、雪村庵が書斎軸に見るような塵外の溪谷に建っているものと想像していましたが、里の人家に近いところにあったのにはいささか意外でした。

庵は間口四間、奥行二間半のぬれ縁付きの藁葺き平家(現在は赤いトタン屋根で覆う)の小庵で、内部は二部屋に分かれています。入口の上には「桜梅山」、小部屋の仏壇の上には「雪村庵」と凹刻した板額が掲げられており、いずれも、明暦3年(1658)に雪村庵を再興した三春の高乾院住職一元紹碩の揮毫になるもので、「雪村庵」額の裏面には雪村庵の由緒が墨書されています。前庭には山号にある古木の紅枝垂桜の大樹が庵を覆うように植わっておりました。

会田老人は会田家代々の言い伝えとして、雪村が旧暦の12月28日の餅つきの朝に亡くなったこと、雪村庵の背後にある墓所のうち、大きな自然石の墓は雪村和尚の墓で、みだりに立入ってはならないということ語ってくれました。その会田老人の風貌が雪村自画像のそれとどことなく似ているのが印象に残りました。

(林 進)

季刊 美のたより No.58

昭和57年 3月 4日

発行 大和文華館